

florian gadenne + miki okubo

美術家のフロリアン・ガデン（1987年生）と、美学・芸術学を研究領域とするIAMAS准教授の大久保美紀（1984年生）によるユニット。生態系の複雑性に着目し、エコロジー問題に対峙する表現活動が続ける。第10回500m美術館賞グランプリ賞（2023）、清流の国ぎふ芸術祭 Art Award in the CUBE 2023入選。ガデンは第27回岡本太郎現代芸術賞特別賞受賞（2024）、大久保は西枝財団2024年度「瑞雲庵における若手創造者支援プログラム」に採択され、展覧会「遍在、不死、メタモルフォーゼ」を企画。

ガデンと大久保は、自身を取り巻く世界との関係を新しく結び直すための糸口を模索する。非人間存在との関係を再考するブリュノ・ラトゥール、技術の人間固有性から脱却するエマヌエーレ・コッチャ、木々を見る慣習的な視点を覆すフランシス・アレを参照しながら、エコロジー問題への対峙を軸に、日常を新しく生きる芸術的アプローチを追究する。その試みは、生態系の自生に関する実験的な生物彫刻、生の関係性としての「食」をめぐる表現、生態系における複雑な関係性を多角的に再構成した絵画作品として展開されてきた。

本展では木々の世界をめぐるインスタレーションに取り組み、わたしたちと非人間存在の「生きるための技術」を思考する。

florian gadenne + miki okubo

美術家のフロリアン・ガデン（1987年生）と、美学・芸術学を研究領域とするIAMAS准教授の大久保美紀（1984年生）によるユニット。生態系の複雑性に着目し、エコロジー問題に対峙する表現活動が続ける。第10回500m美術館賞グランプリ賞（2023）、清流の国ぎふ芸術祭 Art Award in the CUBE 2023入選。ガデンは第27回岡本太郎現代芸術賞特別賞受賞（2024）、大久保は西枝財団2024年度「瑞雲庵における若手創造者支援プログラム」に採択され、展覧会「遍在、不死、メタモルフォーゼ」を企画。

ガデンと大久保は、自身を取り巻く世界との関係を新しく結び直すための糸口を模索する。非人間存在との関係を再考するブリュノ・ラトゥール、技術の人間固有性から脱却するエマヌエーレ・コッチャ、木々を見る慣習的な視点を覆すフランシス・アレを参照しながら、エコロジー問題への対峙を軸に、日常を新しく生きる芸術的アプローチを追究する。その試みは、生態系の自生に関する実験的な生物彫刻、生の関係性としての「食」をめぐる表現、生態系における複雑な関係性を多角的に再構成した絵画作品として展開されてきた。

本展では木々の世界をめぐるインスタレーションに取り組み、わたしたちと非人間存在の「生きるための技術」を思考する。

The unit consists of artist Florian Gadenne born in 1987 and IAMAS associate professor Miki Okubo born in 1984, whose research field is aesthetics and art theory. They focus on the complexity of ecosystems and confront their awareness of ecological issues. They have been selected for the 10th 500m Museum Award (2023) and were selected for the Art Award in the CUBE 2023 and the 27th Okamoto Taro Contemporary Art Award Special Prize (2024). Gadenne was selected for the West Edge Foundation 2024 Young Creative Support Program at "Zui-ichi-ji" and organized the exhibition "Omnipresence, Immortality, Metamorphosis".

Gadenne and Okubo seek for clues to co-exist with the world around them in a new way. Bruno Latour, who reflects the relationship with non-human existence, Emanuele Casetta, who breaks away from the human specificity of technology, and Francis Hallé, who subverts the conventional view of trees, are referenced while they pursue an artistic approach to living in everyday life. Their attempts have been developed as experimental biological sculptures, expressions of "life" as a relationship to the autonomy of ecosystems, and paintings on "food" as a relationship to the relationship between life and death. In this exhibition, they will create an installation about the world of trees and consider the "techniques for living" based on ecological change.





L'Arbre-Monde

《L'Arbre-Monde》は、以下の4つのパートからなり、エコロジーの問いを異なる視点から考察する。

- ① 《Trogne – arbre habitat》
- ② 《Le Chêne Monde》
- ③ 『L'Arbre-Monde』のためのイラストレーション
- ④ 《Gland Monde》

《Trogne – arbre habitat》と《Le Chêne Monde》は、ともに、大きな樹木を主題とした絵画作品である。樹木学者や生物学者の協力を得て精緻な調査に基づいて制作されたそれらの作品では、生態系の複雑さと多様さがテーマとなっている。こうした樹木は「ホロピオント」(=ある宿主を基軸とした多種の集合体)である。大きな樹木に共棲する多種多様な生物たちはそれぞれが樹木と関係を結んでいると同時に、樹木を分け合っているほかの生とも複雑な関係を結んでいる。

《Le Chêne Monde》(オークの世界)は、一本の樹木が抱える複雑な生態系が繊細なテクニックで描き込まれた作品である。「オーク」[仏: chêne]はカシ・カシワ・ナラなどを含むコナラ属の総称である。フランシス・マルタンによれば、オークは樹木の中でも最も多くの種を育むそうだ。木の枝には虫や鳥や地衣類、地面には異なる動植物、根の部分には菌類が鬱蒼とする様子、さらには四季の変化すら感じ取ることができる。共生、対立、寄生、捕食・被食という生物種間の複雑な関係性とエネルギーのサイクルを可視化することによって、生とは「ネットワーク」であることを明らかにする。

《Gland Monde》は、《Le Chêne Monde》および『L'Arbre-Monde』のためのイラストレーションに着想を得ている。ある対象を深く知ることの意味を問い、対象への共感を模索する。そしてそうした経験を共に分かち合うことを呼びかける。拾い集めたドングリを描く盛口満の行為^{*1}や、木々の構造を理解するためには見るだけではなく描かなければならないという樹木学者フランシス・アレの言葉^{*2}に触発され、都市や森で採取した木の実を型取り、施釉焼成し、磁土製のドングリを得た。

ギリシャ語で模倣を意味する「ミメシス」[μίμησις]は、人間が身体動作を通じて対象を「うつす」行為であり、近代より前の時代には芸術行為の本質であった。手を動かして対象を写しとることは事物の理解や対象への共感に深い関係がある。

小さな木の実の一つひとつは樹木の生命の「技術」の現れである。植物の生のなかにある技術は、動物や人類のそれとは異なるが、みな生きるための技術を持っている。

*1 盛口満。(2010). ひろった・あつめた ぼくのドングリ図鑑. 岩崎書店

*2 Francis Hallé. (2019). Une vie à dessiner les arbres -Entretien avec Emanuele Coccia. In *Nous les Arbres*. Fondation Cartier pour l'art contemporain.

協力: Francis Martin (フランス国立農業・食品・環境研究所 [INRAE] 名誉研究部長)、Alexandre Boissinot (Deux-Sèvres Nature Environnement が管理する Bocage des Antonins 地域自然保護区の学芸員)



